

法栄寺歳時記

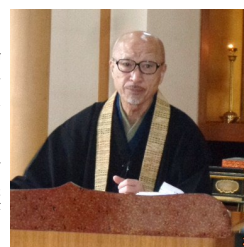
2026年
6月1日
第154号
発行
法栄寺門徒会

法栄寺定例法話会

五月九日（土）午後一時より定例の法話会がありました。この日の講師は、何度かご縁を頂いている、厚岸町の正念寺住職 波佐谷 見正 師でした。

三帰依文唱和、簡単な自己紹介に続き、蓮如上人の聞書より「蓮如上人、お廊下を御とおり候いて、紙切れのおちて候いつるを、御覧ぜられ、『仏法領の物を、あだにするかや』と仰せられ・・・」を出され、私たちの営みの全てが仏法領であると説かれました。

親鸞聖人は、遇に「たまたま」とふり仮名を付けたそうです。同義で「計らずも」も出され、尊いご縁であり、釈尊も親鸞聖人もそのご縁にもようさようさようになり生き方を開かれたと



説かれました。

或るお寺の掲示物の言葉を紹介されました。「いかなる境遇にあつても、年をとつても、病気になるつても、大事な人と死に別れても、自分自身の死が迫つていても、毎日を意義ある人生として、尊い人生として、生きていくことが何処で成り立つのか。」というもので、答えはない。あるとすれば、南無阿弥陀仏と説かれました。

世の中の色々な状況は縁。全てのことが縁によつて起つて来る。その縁に依つて身に付いた意識は、一人一人違う。寺は凄い。不特定多数が集まる。選ばず・嫌わず・見捨てずの場所、自分はどうか、はつとする。親しい人との別れ、皆経験している。だから、助けあふ・相談し合う・皆仲良くあつて欲しいと説

永代経法要

蓮如上人の「仏法は若きときたしなめ、年とれば、

一時より永代経法要が厳修されました。住職・坊守・役僧の三人による読経の中、焼香がありました。

その後、法話が二席ありました。この日の講師は、安平町の光専寺住職 古柳 誠幸 師でした。

讃題として、歎異抄の第一章を讀誦され、浄土真宗は、報恩講教団と言われると始められました。真宗における仏事は、全て



行歩もかなわず、ねむたくもあるなり」についても説かれました。

南無阿弥陀仏のお心は、濁世の目足。浄土三部経の要は、如是我聞。阿弥陀の世界は、願いの世界。濁世とは、曖昧もこ・はつきりしない世界。釈迦も親鸞聖人も悩んだ、それが仏教の起源。等について説かれました。「平和と戦争」の絵本の紹介もありました。

報恩の仏



最後に、南無阿弥陀仏のお心を一人一人頂いて下さいと括られました。

他宗は、追善の仏事で私が亡くなった人のために善や功德を追加していくと考える。報恩の仏事は、亡くなった方を諸仏とし、私達一人一人が南無阿弥陀仏のお念仏を頂いていくと受け止める。そもそも、仏事とは、仏様がなす・仏様の仕事で、衆生を救つていくことと説かれました。

本堂の造りにも触れられ、お内陣・下陣・参詣の間で構成される。お内陣は、浄土を現わし、真実のはたらしの場所。真実、姿も

形もないと同窓会の話で説かれました。真実が見えるようにするのが方便で、絵像・立像等がそうであると説かれました。また、内陣の縦疊には無量の諸仏が据わっていると言われました。念仏は、私の中から出てきたのではない、その諸仏から頂くものと説かれました。

凡夫であることに気付けば、お互い頭を下げる。争いが起ることがなくなる。親鸞聖人は、「世の中安穩なれ、仏法広まれ」と呼びかけられたそうです。

この他、お経の成り立ち、親鸞聖人のお言葉、永代経の懇志の意味、濁世の無情等について丁寧に説かれました。

法栄寺門徒会役員会

四月三十日（木）午後三時半より、標記の会が法栄寺広間で開催されました。真宗宗歌斉唱に始まり、住職挨拶・門徒会役員改選・御門徒お寺葬・庫裏改修・門徒会収支決算報告・開基四十五周年記念誌・住職法衣（7条袈裟）寄進、等について、説明・意見交換が活発になされました。恩徳讃斉唱し、散会しました。

法栄寺門徒会奉仕活動

【お磨き】

五月二十一日（木）午前九時よりお磨きがありました。永代経に備え、各部屋等の清掃もしました。

《奉仕活動参加者》敬称略
末吉夫妻、高橋、羽野、竹内、三上夫妻、楠美、谷村、三谷、廣中、大島夫妻

